

謡伝書における音声観察

——『音曲玉淵集』以外の資料から——

竹村明日香（お茶の水女子大学）

一. はじめに——『音曲玉淵集』に関して——

中世日本語の発音を知ろうとする際、近世の謡指南書である『音曲玉淵集』（享保十二年〔1727〕刊）が参照されることが少なからずある。本書の巻一・二には豊富な用例と共に連声・四つ仮名・ガ行鼻濁音・開合等についての記述があり、例えば、「つめ字」（促音）から母音へと移るタ行連声に関しては、次のような解説がある。

(一) 一 つめ字よりうつりやうの事

凡てつめ字をキントウ
むれはをのつと音解申

○ あい う ゑ を

たち っ て と ト 唄 フ

チャトモ

チエトモ

月庵

佛意

悉有

法縁

佛恩

〔後略〕

〔音曲玉淵集〕巻一)

しかし、「つめ字」に関する記述は、近世に流布した謡伝書『塵芥抄』（天正十一年〔1583〕）では、次のように簡素な記述となっている。

(二) 一 つむる字ハ 前の程をすこしおそく出して はやく詰て 次の字へうつりたるよし

法花説誦のこゑ絶す愛別離苦のことわり 此等也 書々されす

能楽研究で『音曲玉淵集』は、「編者の見識が発揮された独自性を持つ内容」（能研編一九九八：四一六頁）と評されており、実際その通り本書は当時出回っていた他の謡伝書とは毛色が異なる。本書には、契沖などの国学の知見が取り入れられていること（『石淵』一九四四他）、そして、「日常ではなくなっている音韻特徴と発音方法を詳細に解説する」（『日本語学大辞典』）ものであるという見方が従来行われてきた。しかし近年、本書以外の謡伝書を調査した研究では、むしろ反対に、謡伝書の発音知識を国学者らが自著に取り込んでいること、また謡伝書は先進的な音声分析を行っていることが明らかになりつつある（後述）。

本発表ではこうした点をさらに明らかにすべく、謡伝書における音声観察と、近世国学者におけるそれらの摂取状況を示したい。

二. 室町後期以降の謡伝書の特徴——表・竹本（一九八八）より——

▼権威付けのために故人に仮託する傾向あり。師から相伝された伝書を、謡数寄の素人が合成・再編して再伝するため内容が没個性的。流派の特定ができない。

1 『音曲玉淵集』の項（坂本清恵執筆）、日本語学会編（二〇一八）『日本語学大辞典』東京堂出版、一〇五頁。

▼「ほとんどが能楽論にはほど遠い内容の謡の技術指南書で、世阿弥・禅竹の音聲極論とは明らかな一線を画し、禅風の論よりもさらに具体的かつ便宜的である。」(三二二頁)

一方で日本語学的観点から見ると、興味深い記述が随所に見られる。(以下、傍線部は筆者注)

三例 (一) 濁音前鼻音

中世までは「[ɲa] [ɲda] [ɲba]」のようにガ・ダ・バ行濁音に前鼻音が伴っていたことが知られている。濁音前鼻音に関する記述は、中世では『日本大文典』(1604-08年)のような外国人宣教師によるものが最も早く、日本人の手になるものとしては『以敬斎口語聞書』(1697-1731頃か)が最初とみられている(高山一九九八)。ところがそれより三十年ほど早い寛文二年〔1662〕刊の『謡鏡集』(別名：うたひ鏡)には、ガ行・バ行の濁音前鼻音を記したと見られる例がある。

(三) 牙音の清音と云ハ。牙齒ともにひと敷ひらき舌を上あぎにつけず。下ばのうちに付て。声を出す濁音と云ハ牙齒髓かに合て。はなの中へ少声をかよハしてうたふ事なり

〔謡鏡集〕「第一 五音清濁之事」

(四) 唇の音の清と云ハ上下の歯をひらき。舌を正中に置。急に声を出すなり。濁声と云ハ上下の歯を髓に合て。声を出すへしとおもふ時。鼻のうちへ心をかけ。声を出す事也

〔謡鏡集〕 同右

▼上巻のみ(元三巻本か)。著者不明。版元「京 一条通新町西入」。

▼「先行諸書そのままの転載とおぼしき記事は皆無に近く、当世風に演繹して説き直され、

(中略) 貴人に所望されて清経の曲舞以後を謳った由が見え、どこかの段階で玄人が編纂に関与して成立したらしい。」(能研編一九九八、二八六頁)

四例 (二) アクセント

胡麻章でアクセントを示す例としては、世阿弥能本や近松浄瑠璃譜本がよく知られている(坂本二〇〇〇他)。金春禅竹『毛端私珍抄』にも「いぬ(犬)」の方言アクセントを述べた記述があるが、謡伝書の中には、より多くのアクセントを示した例がある。

▼奈良県宝山寺所蔵の金春家旧蔵伝書の一つ。仮綴大本。江戸初期の写しか。

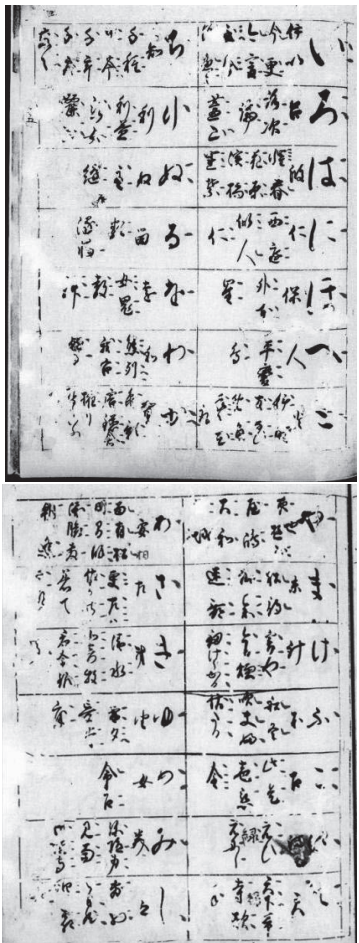
▼伝・金春宗筠著『宗筠袖下』記載後の数丁に、胡麻章付きで「いろは」順に並べた語彙やアクセント型ごとに並べた語彙が掲載されている。

【図一】『金春流詠口伝集 宗因袖下』(般若窟文庫二〇一九)

² 早稲田大学演劇博物館、神戸女子大学森修文庫、野上記念法政大学能楽研究所(刊本の写し、鴻三七

113)、高知城歴史博物館山内文庫(書名「宇多伊茂の」)に所蔵がある。

³ 金春宗筠は、禅竹の子で、禅風の父である金春元氏。『宗筠袖下』は、全百ヶ条の書で写本も多いが、内容からみて宗筠の著述であることは否定されている(表・竹本一九八八：三二一―三二四頁、能研編一九九八：一二二頁)。



主に、高アクセントを示す「一(平胡麻)」「〷(上げ胡麻)」と、低アクセントを示す「〵(下げ胡麻)」を朱で附している。いろは順語彙は約三百語、数字が約二十語、「上下の文字」が約百語

「下をとす文字の事」が約三十語、「中をとす文字の事」が約二十語あり、「上下の文字」以降はアクセント型ごとに語を羅列している(※以下、Hは高アクセント、Lは低アクセントを示す)

- (五) 憚 (H H H) 春 (L H) 花 (H L) 原 (L H) 濱 (H H)
 橋 (H L) 生 (H L) 葉 (H) (いろは語彙「は」の項)

- (六) 春 (L) 秋 (L) 夏 (L) 冬 (L) 空 (L) 其方 (L) 中 (L) 経 (L) 常 (L)
 舞 (L) 酔 (L) 誠 (L) 露 (L) 出 (L) 御 (L) 我 (L) 縁 (L) 只 (L) (※傍線部アクセントは存疑)
 (上下の文字)

- (七) 月 (L) 雪 (L) 花 (L) 波 (L) 雲 (L) 清 (L) 夏 (L) 北 (L) 山 (L)
 天 (L) 音 (L) 寺 (L) 歌 (L) 事 (L) 後 (L) 本 (L) 旅 (L) 又 (L) (下をとす文字の事)

「女 (H L)」「現代京アはH L」等の例から、本資料は近世初期の京阪アクセントを反映していると思われる。単語をアクセント型ごとに分類をしようとする試みは、現代の「アクセント類別語彙表」とも通じるものがあり、分析観点として注目される。

五 『塵芥抄』と『筆之次』

謡伝書の中で最も著名で、永く流布した謡伝書に『塵芥抄』とその解説書の『筆之次』がある。

▼『塵芥抄』: 天正十一年 [1583] 年成立。一つ書きで謡・音曲関係の説を羅列し、謡の用語の解説が主体となっている。伝本多数。後代への影響力が大きい(能研編一九九八)。

▼『筆之次』: 寛永十九年 [1642] 成立。進藤以三著。『塵芥抄』の本文を一つ書きで引用した後に解説を付す(辻一九八二a・b)。積極的に門弟に書き与えて同門の弟子たちへと伝播していったらしく、伝本多数(田草川二〇一一)。

⁴ 『一〇一』の胡麻章はH L Lと解釈すべきことが坂本(二〇〇〇)でも指摘されている。

⁵ 進藤以三(一〇一)寛文二 [1662] 没。進藤流の始祖・進藤久右衛門忠次の嫡男。舞台には立たず、寛永一元年禄初年頃まで京都で素謡の普及・指導に努めた。近衛尚嗣や飛鳥井雅章の日記に以三の謡に関する記述が現れ

『音曲玉淵集』には「進藤以三」の名が見え、また「筆之次」(巻四)という形で引用もしている(辻一九八二a)。その『筆之次』には発音に関する記述が頻出する。

五・一・アクセント核を表わす「アタル」

『筆之次』ではアクセントを説明する際、「アタル」という節名をアクセント核を表す術語のように入れて用いている(竹村二〇二四)。「アタル」は「モーラ目を高く発声し、後続のモーラを低くする節である」。

(八) 源氏供養の曲舞に、心をかけてといふ心のなかのこの字を字あげて、世間にうたひなれたれども、あしきふしなり。はじめのこの字に、あたりてうたふべし。

(「文字なまりはわろし」)

(九) 又関寺に、さいなみやまの真砂ハつくる共、此くの字のあたりやうにて、作の字に成てわろし。くの字をあげて、るの字さげて、るの字ひびくやうに〔※発音補―くの字に〕あたる。(中略) かやうにあたれば、盡の字になりてよし。(「しやうを文字にうたふといふは」)

「アタル」は中世から使用されていたと見られ、永祿三年〔1560〕奥書の謡伝書にも見られる。

(十) a. ■ 〔節首〕 当。文字アタリ。此次ノフシ必サガル成。

b. 一、一「当」の字付ル事、一字はつて二字めさがる也。

(「節章句秘伝抄」所収「温泉彦次郎久長伝書」)

右の通り、『筆之次』では、下降を表す節である「アタル」を用いてアクセントの正誤を説いている。それは即ち、「単語のどこに下降があるか」というアクセント核の位置を問題にしているということであり、「語内の下降位置によりその語が同定される」という日本語アクセントの一特徴を近世の謡役者が認識していたことを表しているのである。

また本書では、「常にいふ詞(＝日常で言う言葉)」ではどうか、という記述が複数回見られる。

(十一) 〔※漢字の四声に合わせて謡うべきだと説いた後〕但、かやうに四声のせんさくのミにしては、一ふしもなるまじき也。故いかにといふに、常にいふ詞にもちがひ多し。たとへば、〔※

発表音補―山の二字ではヤの部分が高くなるが〕山姥と云時は、山といふやの字さぐる也。

(「筆之次」「章句のならひの事」)

従来、『音曲玉淵集』では、中世からの伝承音が保存されていると見なされがちであった。しかし少なくとも近世前期に流行した進藤流の謡伝書では、「常(日常)」で用いる語のアクセントをも分析対象とし、日常語の発音を合理的に分析しようとする科学的態度を示していた事がわかる。

六 近世国学者と謡伝書―「分析の枠組み」としての間接的利用―

近年、謡伝書の発音分析が国学や歌学に取り込まれていたという指摘が行われている。

堂上公家集の愛顧に支えられて活躍した(宮本二〇〇五)。江戸初期には進藤流謡本は観世流謡本に次いで多く刊行されており、観世座に並ぶ勢いであった(表一九六五)。

▼本居宣長『漢字三音易』(天明五年 [1785] 刊)の四声観は、『塵芥抄』の「チャワンテンモク(茶碗天目)」の四声観に由来する(竹村二〇二三)。

▼契沖の仮名遣書には、進藤以三著の謡伝書『筆之次』の利用の跡がある(竹村二〇二四)。

▼歌学書の四つ仮名に関する言説は、謡曲から流入している可能性がある(山田二〇二四)。

契沖や宣長は、「本文の引用」という直接的な形で謡伝書を利用せず、「分析の枠組み」として用いるという間接的な利用していると発表者は考える。つまり彼らの音声分析の背景には、謡伝書の発音知識が存在したと考えるのである。以下、その事例を二点挙げる。

六 一、ヲは軽くオは重し ―オラの軽重―

本居宣長の『字音仮字用格』(安永五年 [1796])における「喉音三行弁」と「おを所属弁」は、約六百年にわたる五十音図のオラの位置錯誤を糺したものと名高い。宣長は「喉音三行の区別を大枠開合で説明し、『於乎』については『皇国の音の軽重』という独自の概念を設定」(釘貫二〇〇七、百頁)することによって解決を図った。

(十二) ソモ／古へ仮字ハサラニ開合ヲ以テ分々タルモノニハ非レドモ、自然ト開合ニテ分ル、理アリ、マツ開口音ハオノヅカラ軽く、合口音ハオノヅカラ重シ、此軽重ハ韻書ニ云トコロノ者ニ非ズ、御国ノ音ノ軽重ヲ以テ云也

(『字音仮字用格』「字音仮字総論」『本居宣長全集』巻五、三三七頁)

釘貫(二〇〇七)では「古代国語の発音を独自に規定した『軽重』のアイデアがどこからもたらされたのか詳らかにしないが、ア行ワ行の仮名の弁別を『軽重』で説明するのは武州麻布の遁危子『和歌童歌抄』に先例がある」(九五頁)と述べる。

『和歌童歌抄』は、宝暦四年 [1754] 刊のテニヲハと仮名遣いに関する書である(佐藤一九七六)。本書では確かに、左のようにオラの軽重について触れている。

(十三) 「前略」いろは四十七字の内 いろをお 江多と同じこゑのあるはいはかるくゐはおもし。をは。かろくおはおもし。江はかるくゑはおもし。

(『和歌童歌抄』、佐藤一九七六・五九頁より引用)

一方で、謡伝書でも「かろし」「おもし」は謡の基本的な用語として中近世に頻出する。

(十四) 音曲をかろきおもきと云事 世上に申あつかひ伝る いかん大方ハはやさをかろきといひ しかなるをおもきと申伝るか 此意得大事の相伝也

(『音曲口伝』「音曲に条々儀あり」永正十八 [1521] 年奥書)

(十五) 一、惣別、うたひに、おもふ・かろいといふ事、よくしりたるがよし。

(『金春安照秘伝書』慶長十一 [1606] 年奥書)

(十六) 惣別軽き字ハ小に 重きハ大成へし 「中略」口伝の上 亦分別成へし

(『塵芥抄』「同四十余段の口伝と三事有」)

宣長に先行する契沖は、稿本『和字正監抄』にて明確に、「音曲」を生業とする者が「才はフより重し」と言っていることを記している（刊本では削除）。

(十七) 〔觀〕わみうゑお、此みうゑおの四字は、みは和以切、うは和字切、ゑは和江切、おは和遠切にて、能生のわの聲既に尤も重ければ、所生のみうゑお、本音のいうえをよりは重き理なり、音曲を業とする者、おはをより重しといふは、此理をきける歎、其外は沙汰なき歎

（目筆稿本乙本『和字正監抄』、全集十巻、二九八―二九九頁）

〔音曲〕が謡を指すとすれば、どのような記述があったのだろうか。その一例となるのが宝暦五年〔1755〕山岡孫三郎筆『謡道秘蔵抄』である。本書は、『和歌童翫抄』刊行翌年の成立である。

(十八) 一 文字あつかひ開合の事

附色 当 色落 息当

カロシオモシ イトル をトオ カロシオモシ カロシオモシ
カロシオモシ

カロシオモシ

じゃう ちやう そう はう きやう けふ

じ ぢ よく 諷分候事

色当やはらかにあたる 色落やはらかにおとす女に多し 息当のともりはなへ返し当ル
（宝暦五年山本孫三郎筆『謡道秘蔵抄』）

ただし記述内容には差が大きく、両者に影響関係は見出しがたい。仮名の軽重や開合、四つ仮名を記すことから、右の記事は先行する仮名遣書からの引用である可能性もある。しかし「し」と「ち」も軽重で捉えていること、節の説明も添えていることなどを勘案すると、仮名遣書とは別の、謡の世界におけるオラの軽重に関する説を収めたものとも考えられる。宣長や契沖のオラの軽重に関する言説は、こうした謡伝書の中から借用された可能性が十分想定し得るのである。

六、二 仮名を引くと母音が出る一長音における母音の析出

宣長の「おを所属弁」では、五十音図のア行とワ行のヲとオの錯誤を修正するために、①於が安以宇衣と同類であること、②於が「お」に連なることを統一的に捉えようとした（釘貫二〇〇七、一二三頁）。その①の証拠として、「地名の引き母音として安以宇衣類とともに於類の仮名が用いられること」、神楽や催馬楽などの「長ク引テウタフ声」に於が用いられていることを指摘する。

(十九) 「…」 木国ヲ紀伊トカクガ如シ、「伊ハきノ韻也」、「…」 備中ノ郷名都宇「…」 日向ノ郷名

觀嗽「…」 をノ仮名ヲ加ヘズシテ、皆お二用ル飢嗽等ノ仮字ヲ加ヘタル（中略） 凡テ韻ハ

あいうえお二限レルコトナレバ、是又あ行ハおナル明証ナリ、

。鴻山文庫三七）。能研編（一九九八）によると山岡が師匠の厩橋修貞から許されて転写した本であるという。本書は、『觀世大夫の法名列記や觀世流演目記載からも、本書が觀世流の人の手で編まれていることは確かである。厩橋修貞が觀世流を嗜んだ人物で、墨筆の指導を受けた人物の編者などに基つて編んだ書ではあるまいか。筆者の山岡はそれを忠実に転写しただけのようである」（二四三頁）とある。山岡、厩橋ともに未詳だが、山岡は江州の武士かと推測されている。山岡は寛延四年山岡孫三郎筆『謡書』（鴻山文庫三七）も残している。

〔字音仮字用格〕「おを所屬弁」『本居宣長全集』巻五、三三三頁

(二十) 又神樂サイバラ歌ノ古本ニ、長ク引テウタフ聲ニハ、各其韻ノ安以宇衣於ノ字ヲ下ニ添ヘテ書ルニ、こそとのほもよるをノ聲ニハ、ミナ於ノ字ヲ添ヘタリ、求子ノ歌ニ、安波禮衣干者也布留賀茂能也之呂於「中略」云々 (同右)

特定の音節(仮名)を引くと母音が出るという記述は、謡伝書にしばしば見られる。『筆之次』を含む『麁芥抄』系謡伝書においては、「文字うつり」の条に現れる。

(二十一) 此うつり「※発音補—文字うつり」の事、たとへば井筒に、何の音にか、此のより、音のをに取つく程也。のをひけば、をの字出る也。「中略」又、二字うつりと云も、たとへば江口に、捨人をおもふ、此捨人のとより、をの字出るうへに、又をの字二つ有。「中略」きの字にいの字出、くの字にうの出る也。

〔筆之次〕「文字うつりとハ」

(二十二) 是ハ何にても字を引候へハあとに一字つゝ字をうむ物なりたとへば、らの字を長く引候へハあの字出きたとへハさひしき道すから秋のかなしみと云所、らの字を引、あの字を云にをよばさるや (『謡花伝書(謡書)』「文字うつり」慶安三年[1650]刊)

契沖『和字正濫鈔』巻一では、梵字の説明において、音を引けば摩多(母韻)になることを述べる。ここでは『筆之次』(二十二)と同じくカ行の例を挙げている点が注目される。特に自筆稿本(乙本)では仮名を用いて書いていることから、『筆之次』と類似性が高い。

(二十三) 枳を引けば伊となり。俱を引けば字となり。計を引けば曳となり。古を引けば遠となりて。韻皆摩多の声に帰る故。点書すなはち韻なり。

〔刊本『和字正濫鈔』十一ウ、『契沖全集』巻十、一一八頁〕

(二十四) ^{〔朱〕}〈きを引けはいとなり、くを引けはうとなり、けを引けはえとなり、こを引けはをとなりて、ひゝき〉^{〔朱〕}皆、摩多の声へに帰るとなる故・点書すなはち韻なり。

〔自筆稿本乙本『和字正濫鈔』九ウ、『契沖全集』巻十、二九六頁〕

宣長や契沖の記述を読むと、地名や催馬楽、梵字などの例から母音の析出に気づいたかのように受け取れる。しかしこれらは検証材料として挙げていただけであって、「仮名を引けば母音が出る」という着眼点そのものは、検証以前から謡や謡伝書を通じて知っていたとしても不思議ではない。彼らは謡伝書の発音知識を援用し、演繹的に検証を行ったとも考えることができよう。

勿論、謡伝書では引き母音を「を」としており、「お」を想定した宣長の理解とは隔絶している。宣長は謡伝書の記述を盲信するのではなく、音声的分析として信用に値する部分のみを「分析の枠組み」として利用したと言えよう。つまり引用のような直接的利用ではなく、間接的利用である。その態度は『筆之次』の不整合な部分を削除し、合理的な部分のみを仮名遣書の記述に利用した契沖とも通じている(竹村二〇二四参照)。

近世において謡伝書は、当代語をも分析対象とした先進的な音声観察を行っていた。国学者らはそこから学び取り、有用な部分だけを間接的に利用する手法を採ったと考えられるのである。

七. まごめ

1. 近世初期の謡伝書では、調音音声学的な分析や、アクセント型の体系的把握を行うなど先進的かつ合理的な試みを行っていた。特に『筆之次』では「アタル」という節名で語のアクセント核を示す他、日常語の分析も行っている。
2. 近世国学者らは謡伝書の発音知識を間接的に利用している。契沖や宣長の著述に現れる「オヲの軽重」や「長音化による母音の析出」という観点は、謡伝書でなじみのある内容であり、彼らは分析の枠組みとしてそれらを利用したと見られる。

【参考文献】※傍線部の略称名を用いたものもある。

岩淵悦太郎(一九四四)『謡曲発音資料としての謡曲英華抄』橋本博士還暦記念会編『国語学論集』、岩波書店
表章(一九六五)『鴻山文庫本の研究』わんや書店
表章・竹本幹夫(一九八八)『四室町後期・江戸初期の伝書とその特質』『岩波講座 能・狂言Ⅱ 能楽の伝書と芸論』岩波書店

釘貫亨(二〇〇七)『近世仮名遣い論の研究』名古屋大学出版会
坂本清恵(二〇〇〇)『中近世声調史の研究』笠間書院

佐藤宣男(一九七〇)『和歌童謡抄——翻刻——』『藤女子大学国文学雑誌』一九

田草川みずき(二〇二二)『浄瑠璃と謡文化——宇治加賀掾から近松・義太夫へ——』早稲田大学出版部

竹村明日香(二〇二三)『宣長と謡伝書——『漢字三音考』にみる四声観の摂取——』第二回日本文献研究会
発表資料

竹村明日香(二〇二四)『契沖の仮名遣書における『塵芥抄』系謡伝書『筆之次』の利用の跡』第一三四回国語学
語彙史研究会発表資料

高山知明(一九九八)『十七世紀末の前鼻音の実態について——『以敬斎聞書』『和字止蓋抄』の再検証——』

『香川大学国文研究』二十三

辻宏一(一九八二a)『資料紹介 筆之次』『芸能史研究』七八

辻宏一(一九八二b)『進藤以三の謡の特徴について』謡本と『筆之次』を中心に『国語と国文学』五九—

野上記念法政大学能楽研究所編(一九九八)『鴻山文庫蔵能楽資料解題(中)』[第二部 注釈書・伝書 他]

野上記念法政大学能楽研究所

宮本圭造(二〇〇五)『第五節 進藤家の人々』『上方能楽史の研究』和泉書院

山田昇平(二〇二四)『うむの下濁る』という言い習わしの歴史』『国語国文』九二—

【調査資料(引用したものに限る)】(鴻山文庫Ⅱ鴻、般右衛門文庫Ⅱ般) ※引用順に掲載。

三浦庚采著・濱田敦編並開題(一九七五)『音曲玉淵集』臨川書店、『塵芥抄』金泥表紙本(鴻三七10)。

『謡鏡集』(神戸女子大学森修文庫本)、『金春流詠口伝集 宗因袖下』(般二010)、謡の秘本『筆之次』(彦根城博物館琴堂文庫本。引用には辻一九八二aを用いた)、表章校訂・法政大学能楽研究所編(一九七三)『謡字資料集成二・細川五部伝書』わんや書店(※『節章句秘伝抄』収録)、表章・小田幸子校訂・法政大学能楽研究所編(一九七八)『熊子資料集成九・金春安照伝書集』わんや書店、久松潜一校訂代表(一九七三)『契沖全集 第十卷』岩波書店、大野晋担当編者(一九七五)『本居宣長全集第五卷』筑摩書房、宝暦五年山本孫三郎筆『謡道秘蔵抄』鴻三七77、慶安三年刊『謡花伝書』(謡書)鴻三七38

付記：本発表は、科研費19K13200・24K03916の研究成果の一部である。